



TITLE:

独逸語学覚書

AUTHOR(S):

古松, 貞一

---

CITATION:

古松, 貞一. 独逸語学覚書. 独逸文學研究 1962, 10: 20-30

ISSUE DATE:

1962-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186282>

RIGHT:

# 独逸語学覚書

古松貞一

- ① Reclam の西独戦後版について
- ② ドイツ語の教科書の註に要望する

## ① Reclam の西独戦後版について

Reclam 文庫は戦前は校正の厳正なことでは有名であって、わたくしたちが学生のころは、安心して使っていたものだし、教室で講読や演習にも何冊か使用されたが、ついぞ誤植訂正をされた記憶がないほどである。ちかごろでは Goldmann や rororo で Klassiker を数多く出版しているが、つい習慣で Reclam を、それも本屋が入手しやすいというので、西独のものを演習用に数冊使用して見た。

Thomas Mann : Tristan

Kleist : Der zerbrochene Krug

Hebbel : Herodes und Mariamne

Lessing : Nathan der Weise

Schiller : Don Carlos

Schiller : Wallenstein

Goethe のものがないのを訝る向きもあるかと思うが、Goethe なら学生が何らかの版で全集か選集をもっているもので、いろいろの版の優劣をたしかめるよい機会だから、特に教材を指定しないことにしているためである。

ところで驚ろいたことに、戦後の西独 Reclam は誤植が非常に多く、しかし悪質なものがかかなり多く見落されていることに気付いたので、その主なものを報告しておく。今後教材として西独 Reclam を使用する場合は、一応当ってからでない危険だと思う。もっともあやしいと気付いたところがあれば、見逃さず、また煩を厭わずに、権威ある版と校合する習慣をつけさせるという副作用はあるけれども、それにしても誤植はやはりない方がよいので、困り物である。しかも綿密にやれば容易に避けられるような、同じ性質の誤植が多いので、先ずそれを挙げて見る。

Nathan から例をとると：

## 独逸語学覚書

Mein Vater! laßt Eure Recha doch (365行) は Mein Vater! laßt, laßt Eure Recha doch が正しいので laßt がひとつ脱落している。意味に変わりがないから尙更ら困るのである。投げやりな校正だから、このような結果になるので、skandieren して見れば、簡単に訂正出来る誤植であるのに、この種の誤植はなかなか多い。

Waffenstillstand (646行) は Waffenstillestand のあやまりで、e が落ちているのは、Nathan が詩劇であることを忘れた校正だと責められても仕方があるまい。これも skandieren して見れば、見落す筈のないものである。

Verlust wird Vorwand (842行) は Verlust will Vorwand のあやまり。

Wenn hier, untern Palmen schon nicht mehr (1148行) は Wenn hier, hier untern ……の hier が一つ脱落しているのである。

Don Carlos から例をとれば： Solange

Der Mann um seines Weibes Herz—Nein, nein!

Der König schläft, ist er um seine Krone (2504行)

とあるのは Solange

Der König schläft, ist er um seine Krone,

Der Mann um seines Weibes Herz—Nein, nein!

の誤植で、一行すっかり逆になっている。これなどは特に学生に校合の必要を痛感させ、練習をやらせる好見本といえよう。

Wer ruft? Du bist's! Eben recht. Ich eile (3567行) は Du bist's! の前に Ah, が脱落している。これに反して Den ganzen Tag nachher (4619行) の ganzen は削除すべきものである。

まだまだあるが、これ位にして、Enthülle du die wunderbare Rätsel (329行) の die は dies の誤植であるとか、Sie sind' gewesen (1112行) の sind' が Enklise: sind's の誤植であり——もっともこの誤植のおかげで、学生に Enklise という術語を一つおぼえてもらう功德はあった——、Der zerbrochene Krug では Ich stand ihm Wahn (347行) の ihm は im の誤植であるなどは、一々列挙しては切りがないほどである。

Herodes und Mariamne では：

Kühn! Selbst für ihn! Doch—es geschah/im Rausch!

とはっきり二行になっているが、正しくは Kühn! Selbst für ihn! Doch—es geschah

im Rausch! と一行でなければならぬ (198行).

Wir sprechen hier vom Möglichen, so denk' ich, (370行) の so は doch の誤植.  
また

Führ' sie herein! (Diener ab.)

Die meld' ich ihm sogleich

とこれまたはっきり二行になっているのも、一行のものをあやまって、行分けしたものである (3130行). これらの誤植は Reclam が詩劇印刷の約束を無視しているところに原因があるので、従来のように約束はやはり守る方がよい.

散文のものの例として Tristan を探って見ても、事情はやはり変らない. Versdrama の場合のようにおとし穴がないから、誤植はずっと少ないけれども、無誤植というわけには参らない.

本年度の教材として使用しているのは Wallenstein で、現在は Die Piccolomini の第二幕まで進んでいるが、これは今までに使ったうちで、もっとも劣っている. Prolog の 133行: Ja, danket ihr's, daß sie das düstere Bild まで読んで来て, düstere は düstre の誤植であることは明かだから、この本もやはり駄目かと、ほかの点もしらべて見ると、12行のあと、アキになるところが、べた組みになっているのも見付かった. Wallensteins Lager に入ると、いよいよいけない. 43行: Aber dort seh' ich drei scharfe Schützen は drei の前に die が落ちており, die drei scharfe Schützen が正しいのである. die を落したのは、あるいは scharfe の綴りにひっかかって、よくしらべもしないで削ってしまったのではないかと思われるが、複数の die があっても形容詞が強語尾で scharfe となるのは、Goethe の Urgötz などを見れば、いくらでもあるので、古くはすこしも異とするに足りぬところで、Düntzer の註釈書がこのところであれこれ文句をいっているのが却っておかしいのである.

123行: Holten sie sich auf der Leipziger Messen は sich のあとに nicht が脱落して意味が通らなくなっている.

711行: Reiterdienst は Reitersdienst の誤植. これも Sanders には Reiterdienst の形で出ており、普通はそれでよいのであろうが、Schiller は s を入れているのである.

780行: Wer hat den Nachdruck und den Verstand は und のあとに hat を繰返して入れねばならぬ. skandieren すればあやしいことがすぐわかる.

789行・Wer bin ich? は Wer ich bin? の悪質な誤植である。

1086行の Hochzeitsschloß は711行の Reitersdienst の逆で, Hochzeitsschloß が正しいのである。

Die Piccolomini に入っても, 依然として改善されていない。

585行: Dahingehen, rufen ihn nicht gleich は Dahingehn,……であり, すぐ下の Octavio のト書の mit einem tiefen Nachdenken zu sich kommend は aus einem tiefen……の誤植である。

1067行の Kriegesschauplatz,

1093行の Kriegesbühne,

1099行の Kriegeslast,

1112行の Kriegesspiel

はすべて Wallenstein が fünffüßige Jamben を基調とした詩劇であることからの必要で, Kriegs- の形をとれないのであって, 注意しなければならぬところ。従って逆に1209行の Kriegsrecht は Kriegesrecht の迂闊な誤植ということになる。

この程度のものを一々指摘しては, 切りがないので, 重要なものだけに限ることにする。345—346行・

Ganz unbegreiflich ist's, daß er den Feind nicht merkt

Denken Sie nicht etwa,                      An seiner Seite.

と印刷されているが, これでは Seite までが一行になってしまうが, 正しくは

Ganz unbegreiflich ist's, daß er den Feind nicht merkt

An seiner Seite.

Denken Sie nicht etwa,

となるので, これなどは Reclam が詩劇の印刷の約束を守らないで, 各詩行を全部左へ寄せて印刷する方式を採用しているために生じた失態であって, この種のもっと悪質なものが Wallensteins Tod にある。すなわち132—133行は:

Ich will doch hören, was der Schwede mir zu sagen hat.

と印刷されていて, 1行に読めということになっているが, これでは七脚で, 皆無ではないにしても, 珍らしいから, もしやと他の版でたしかめて見ると, 果して

Ich will doch hören, was der Schwede mir

Zu sagen hat.

と二行にすべきものの誤植であることが判明した。

ところが Wallensteins Tod にはもっと許し難いあやまりがあるので、2930行に  
Thekla. Wo ist er? Ist er nicht mehr hier?

Herzogin. O denke nicht daran, mein Kind! Hinweg

以下、意味が一応通るのであるが、困ったことに、Thekla のせりふのあとに脱落があつて、正しくは：

Thekla. Wo ist er? Ist er nicht mehr hier?

Herzogin.

Wer, meine Tochter?

Thekla. Der dieses Unglückswort aussprach—

Herzog. O denke nicht daran……

となるのである。

これだけの例を見てもわかるように、西独の Reclam は教材としては不適當なことを証明できたであろう。これに反して東独の Reclam は無誤植とまではいかないが、西独のよりは、はるかにすぐれている。その上 Wallenstein は二冊とも底本として Hermann Böhlau Nachfolger 刊の Nationalausgabe を採用している。これは戦後東独の最もすぐれた出版の一つであつて、東独 Reclam でこれを底本にしているのは、今のところ Wallenstein だけのものであるが、おいおい版を改めるに従つて、底本を Nationalausgabe に変更するものと予想されるので楽しみである。

I. Lager. Die Piccolomini. Seit 1945: 131. bis 140. Tausend.

II. Wallensteins Tod. Seit 1945: 136. bis 145. Tausend.

西独 Reclam の方は I, II ともに、1959年と印刷年がわかるのみで、それ以外は詳しいことは不明である。東獨の方の出版部数から推して、西独の方でも日本から1961年に入つて發注したものが、いまだに第一刷のままであると思えないのだが、たしかめようがない。とにかくかつては世界に名を上げた Reclam のなれの果ての姿を見せつけられたやうで、哀れも一入である。同じ戦後版で Goldmann はなかなかすぐれていることを付記しておく。

## ② ドイツ語の教科書の註に要望する

教科書の註は学生のためのものであることを再確認してほしい。まじめに辞書を引けば

出るものを、一々挙げるには及ばないので、学生に自学自得の習慣をつけさせることが大切で、辞書を引いても分りにくいものに限って、註をつけることにしてはいかがであらうか。もっともいけないのは訳文のようなものを書いてあるばかりの註があることで、教室では翻訳のうまいまづい問題は問題でないで、原文をどれだけ正確に読んでいるかをたしなめ、いいかえや語法の書きかえや、他にすることはいくらでもある。訳にこだわるから——註を見るとそのような気がする——学生に横のものを縦に直すだけなら、翻訳のあるものは教室に出る必要がないなどと放言されることになる。

次にわかり切ったことだけれど註のあやまりは困る。実際に教室で使用して見て気付いた点があるので、具体的に報告して見よう。飯塚信雄氏編：Stefan Zweig：

Der europäische Gedanke in seiner historischen Entwicklung. 三修社、1961年。

18頁に対する註のところに Schütz (1585—1672), Gabrieli (1510—86) とあるが、本文を見ると der alte Heinrich Schütz kommt nach Italien, um bei Gabrieli zu lernen とある。1586年に世を去った Gabrieli のところへどうして1585年生まれ of der alte Schütz が弟子入り出来たのであろうか。Schütz の方は本文に Vorname があったからよかったが、Gabrieli には残念なことについていない。百科事典のしらべ方が、機械的であったと悔まれる。Gabrieli は Gabrieli でも飯塚氏のあげている Gabrieli は Andrea Gabrieli の方で、Zweig のいっているのは、その Schüler und Neffe の Giovanni (1557—1612) で、音楽辞典にはわざわざ Lehrer von Heinrich Schütz とことわってあるほど、両人の関係は深かった。なおこの der alte Heinrich Schütz の alt も弟子入りが1609年だから、何歳になるか、註を入れる方が親切で、このままでは学生はおそらく>老シュツ<と読むであろう。

13頁に eine Art des Redens, des Denkens und des Umgangs とわざわざイタリックにして>ひとつの<の意味をはっきり出してあるのに、註で>……のようなものは<とするのはいったいどういふつもりなのか。

Livius の註に生年、歿年を51—17とある。v. Chr., n. Chr. の指示がないから、数字の大小から見て、学生が両方とも v. Chr. と読むのを咎めることは出来ぬ。あにはからんや正しくは年号までちがっていて、59 v. Chr.—17 n. Chr. なのである。

2頁1行の註として dieses……Wesen der Welt zu verbinden に >der Welt 三格< とあるが、この構文は既に1頁19行に das eigene Ich der Welt zu verbinden で出てい

るものと同じなのである。註を入れるなら、何もわざわざ二度目のところに入れる必要はない。最初のところに入れてほしいし、この三格は *Dativ der Verbindung* で *mit der Welt verbinden* と書き直すとわかり易くなるというのが>註<ではあるまいか。12頁18行の *lebendig* も5頁15行に既出、同じく33頁4行の *Autarkie* も20頁9行に既出とあった調子である。

*der Welt* の註を見、これが註では二番目なので、以後注意が肝要と覚悟したが、直ちにバベルの塔の註に>旧約聖書創世紀第1章<というのが出て来た。もちろんこれは創世記第11章のあやまりである。以下この類いのあやまりが続出するので、とうとう学生にはせっかくの註だが、一応これは無視して、自力で全部検討するように忠告しなければならなかった。本文にも *penseurs* とあるべきところを、*pensiers* と Friedenthal 編の原本の誤植をそのまま持ち込んでいる(26頁)のもうなづけない。

山下 肇氏編 *Musil: Ein Mensch ohne Charakter*. 同学社, 1960年。

2頁4行: *Auffassung* は *Ligatur* ではないから *Auffassung* としなければならぬ。同氏編の *Die Amsel* (同学社, 1961年)にも *Schiff* と *Schiff* とが同一頁内に出ていたり、*Ligatur* については *Ein Mensch ohne Charakter* も困るが、もっとひどい混乱があるから、山下氏は一度通讀して訂正されるとよい。その数の多いのに一驚されるであろう。ドイツ文学専攻へ進む学生以外は、ドイツ語の正しい印刷については、前期二年の間におぼえておかないと、将来ドイツ語で論文を発表する際に、分綴や *Ligatur* の点で幼稚なあやまりをして、笑われることになる。ドイツ文を書くのは、理科系の出身者の方が機会が多いのだから、このことは笑いごとでは済まされない。木村・相良の独和辞典の *Ligatur* のでたらめを一々教室で肩身が狭い思いをするのは、ドイツ語教師の宿命なのであろうか。なにも教科書までがお手伝いすることはあるまい。

2頁9行 *spazieren zu gehen*, 3頁24行 *stehen blieb* 等は全集では分離動詞あつかいに改めてあるし、その方が普通なのだから、わざわざ初版本によることもないと思う。

7頁8行 *Der Starke ist am mächtigsten allein!* の *am mächtigsten* に>形容詞最高級の絶対的用法<と註がついているが、*Prädikativ* としてごく普通の最高級だから、こんな註は入れない方がよい。不用意なあやまりであろう。それよりも註の原則が学生のためと考えれば、この *Spruch* が Schiller の *Wilhelm Tell*, 第1幕第3場における *Tell* のせりふで、*Stauffacher* のせりふ: *Verbunden werden auch die Schwachen mächtig*



## 独逸語学覚書

に対して、Tell の本領を發揮する言葉であることの方が必要な註なのではあるまいか。

3頁10行の von einem dicken Schwamm von Menschen verprügelt の Schwamm も註を入れないと学生には無理である。

27頁25行に Quantus Negatus なる Forscher の名前について註があるのは結構だが、それならなぜ22頁1行の Marquis von Epatant, 33頁1行の Herr Piff, Herr Paff und Herr Puff に註がないのか、piffpaffpuff を引けば辞書に出るから、これは註記しないのだといわれれば、それもよろしかろうが、Epatant はフランス語 épantant (erstaunlich, großartig) からのものじりであることは、あとで Marquis d'Epatant と書いてあることから、たしかであるから、やはり註を必要とするであろう。このごろドイツ語をやっている学生はフランス語を知らないのが多いから。

36頁23行・Bin a amol schön gwen に Ich bin ein schöner Amor gewesen の意味であろうと註があるが、これは Ich bin auch einmal schön gewesen とする方がまさっていないか。傍証は Thomas Mann の Unordnung und frühes Leid のなかにある。

Bettelweibel will kirfarten gehn,

Bettelmandl will a mitgehn.

38頁1行の十戒の註に das Gesetz とあるのも、普通用いる die Zehn Gebote の方を出すのが親切であるし、Zehn と大文字になることを學生が知っているかどうかを確かめるよい機会にもなる。Du sollst nicht töten を第七戒とあるが、これは正しいであろうか。尙聖書事典には十誡とある。

最後に40頁にある Osterhase, Ostereier に関すること、キリスト教徒でない限り、わが国一般の既知事実でないと思われるから、註記がある方が親切であろう。

水野忠敏氏編 R. M. Rilke: Ewald Tragy. 俳文堂, 1961年。

本書でもやはり Ligatur の印刷に関するあやまちと不統一な点が多いのが目立つ。4頁16行に正しく überflüssig とあるかと思うと、Überfluß (43頁28行) となっていたり、höflich (1頁13行), hilflos (2頁18行) はそれぞれ höflich, hilflos の誤植だが、このように Ligatur を用いてはならないところにかなり数多く誤植が残っている。更に本書の原本である Insel-Bücherei に忠実であろうとするあまり、原本の誤植をそのまま受け継いでいるところも多く見受けられる。2頁6行に >Ja<, sagt Herr von Tragy, ..., 2頁21行に >>So<<, meint der junge Mensch ... とあるのに、5頁1行では >>Ja,<ent-

## 独逸語学覚書

gegnet der Inspektor kurz… , 5頁6行では ≧Aber Papa, ≪ sagt der junge Mensch etwas heftig……とコンマの打ちかたが不統一である。この種の誤植はすべて原本通りであるが、原本は Rilke-Archiv の原稿に基づいて校訂した旨があとがきに示されてあるから、Rilke 自身がそのような不統一な書き方をしているのかも知れないし、また Insel の校正係りが原稿に忠実に校正したとも想像できるが、現存作家の Le Fort の三巻本の全集の校正振りから推して、Insel の校正はコンマの打ち方に関しては、かなりあやふやな、一貫性のないものであることがわかっているの、にわかに故人 Rilke の筆のあやまりとも断じ切れぬふしがあるわけである。況んや教科書であって見れば、上のコンマの打ち方の違いを、学生にどのように説明すれば、理解してもらえるであろうか。なお二三気付いた点をあげると：

Seit Lora Hausgenosse wurde, haben alle in der Familie eine Anzahl klangvoller Worte, von denen sie sich früher nie träumen ließen, zugelehrt, und so ihren Sprachschatz bedeutend vermehrt (11頁6行) の zugelehrt のあとのコンマは不要であり、逆に Er empfindet plötzlich, wie die Blicke aller in Gleichgültigkeit oder Bosheit an ihm haften und müht sich mit scheuen Gesten sie abzustreifen (14頁21行) では haften のあとにコンマがなければならない。このような原本に忠実でありすぎるための誤植が、ここかしこで見つかるのである。本文で訂正するのを憚りありとすれば、註で示すという方法もあろう。せっかく学生が現行の正しいコンマの打ち方を習得しているのに、無用の混乱を与えずともよいであろう。尙 eine Anzahl klangvoller Worte と43頁11行の eine Menge Bekannte の不一致も註がある方がよいと思う。

次に註が是非必要であるところを見逃している例をひろって見よう。

i) im Durcheinander des Sonntagskorso (2頁3行)。

Korso の二格は木村・相良でも岩波でも Korsos となっているから、ここが誤植かどうか、学生は迷うところ。このような点こそ註の必要になる大切なところではないか、東独 Duden 及び東独 Fremdwörterbuch では二格には Korsos のほかに österr. auch Korso とある。(日本では相良ポケット独和に採用されているが、本教科書を使用したクラスは上記二種の辞書しか学生は使用していなかった。)

ii) Als die Männer von dem Korso in die leere enge Herrengasse einbiegen, atmet der junge auf (4頁19行) とあって、25行に So gehen sie bis zum Deutschen Theater

とつづくところがあるが、註に>「ドイツ劇場」は der Graben 街から北西に当るく、とあるが、これはあやまりであろう。Herrengasse を更に南東へ進むと Neues Deutsches Theater に突き当たるので、der Graben 街（市街図には am Graben とあり、1頁1行のちょっとひっかかる am という前置詞は図を見れば納得がいく。）から北西にあるのは Deutsches Landes-Theater のことである。拙蔵の Prag und seine Umgebung (Karl Bellmann, Prag. 1900年)の索引に Deutsches Theater, neues; Landestheater, deutsches と出ているところを見ると、Prag では Neues Deutsches Theater の通称が、あるいは Deutsches Theater ではあるまいか。尙ここの文章で時称が歴史的現在であるために、wenn でなく als が接続詞として用いられていることは、既に3頁23行に出てくるが、この als のことは註記するのが親切ではないか。

iii) 9頁3行に Scho<sup>3</sup> の複数形に Scho<sup>3</sup>e が用いられている。これは日本のどの辞書にも出ていないから、註記が必要なのに見逃がしている。大 Sanders には selten Mehrzahl ohne Umlaut とあるのを示せばよい。

iv) Die Älteste steht wie eine Ahnfrau und ruft warnend (12頁11行)。Grillparzer の Die Ahnfrau を知っている我々はよろしいが、学生が辞書を引いただけでは wie eine Ahnfrau の意味は分らぬと思う。こゝも註記を必要とするであろう。

v) Später, als man mit >Cantenac< verschiedene Hoch ausbringt (14頁14行)。日本の辞書には Hoch という複数形はないが、大 Sanders には Hoch と Hochs とが並べて出ている。ついでながら Cantenac は>第二十世紀ラルス<を見れば、Cantenac で造られるぶどう酒の銘がいくつか出ているが、最後に Château-Cantenac がある。わたくしはそれよりも知りたかったことは、このぶどう酒がどれほどの高級品かどうかということ、拙蔵の>フランスの葡萄酒<をしらべて見たが、しらべがつかなかった。どなたかご教示に預かれると幸甚である。

vi) 30頁7行の Oktoberwiese は Theresienwiese のことで、ここで Oktoberfest がにぎわうので Oktoberwiese と通称される。Desch 刊の Schöne weite Welt Deutschland にはっきり Oktoberwiese という文字が使われているのが見つかった。

vii) 34頁12行の Luitpold の註に>Bayern の国王の名<とあるが、これは何かの記憶ちがいではあるまいか。Luitpold は Prinzregent ではあったが、König になったことはないのである。

## 独逸語學覺書

最後に水野氏の附された註の印\*の不統一にも触れておこう。16頁27行：≫Mascagni\*◀、17頁2行：≫Cavalleria\*?◀と統一されているのに、17頁16行：▷Der Bettelstudent◀\*、17頁17行：▷Die Glocken von Corneville◀\*と同じ註の印が引用符の前だったり後だったりするのはいかなるものであろうか。尚ここのところの註17頁2行でわずか一行に三つも誤植が残っているのも困ったものである。

教科書の出版にはいろいろ条件があるが、註はあくまでも、まじめに辞書を引いて予習する学生が疑問を抱くであろうと予測できる項目について、つけてほしいのである。そうでないと、普通の学生の学力でもわかるようなことには註がついていて、しらべても分らぬ肝心のところは知らぬ顔はひどいことになる。既に教科書を出しておられる向きは一度本文と註とを再吟味してほしいと思うので、たまたま使用した教科書のみを例にとるのは失礼とは思ったが、事実をはっきりさせるためには止むを得ないと考えて、学問向上のため、あえて具体例にさせていただいた。この点は深くお詫びしたい。